

県感染症情報センター

声なき感染症を知る ◆2◆

第2回は「鳥インフルエンザ」のお話です。

4月に熊本県の養鶏場で、鳥インフルエンザの感染が確認され、また近隣諸国では、鳥インフルエンザの患者が発生しています。我々を取り巻く環境に見られる、鳥インフルエンザの「不気味な動き」について紹介します。

▽鳥インフルエンザとは
鳥インフルエンザとは、A型インフルエンザ

中国の上海市で、H7N9型と呼ばれる鳥インフルエンザウイルスがヒトに感染したことが確認されました。

その後、感染は中国沿岸部、台湾、マレーシアに拡大し、感染者は400人を超え、死者も100人以上になるなど、アジア地域に新たな鳥インフルエンザウイルスの脅威が誕生したのです。

しかし厄介なのは、このH7N9型と呼ばれるウイルスが、ニワトリ、ウズラなどに感染した時、無症状であるため、どこで流行が拡大しているのかが分からず、予防対策が難しい点です。

▽歴史から学ぶ

ヒトの季節性インフルエンザの歴史を振り返ってみると、1910年代のスペイン風邪(H1型)、1950年代のアジア風邪(H2型)、1960年代の香港風邪(H3型)、

鳥インフルエンザの不気味な動き

中国の習慣関与 予防対策は困難

ザウイルスで起こる鳥の病気のことをいいます。本来、野生のアヒルなどのカモ類(水禽へすいきん)類の20%程度は、腸管にH1型からH16型と呼ばれるインフルエンザウイルスが寄生しています。

一部のウイルスは、ニワトリやウズラなどの家禽(かきん)に伝染すると、感染した動物が死んでしまうことがあります。

▽新たな脅威

鳥インフルエンザウイルスがヒトに感染することは稀(まれ)なようですが、昨年3月末

例は見つかっていません。

この状況には、中国の生活習慣が大きく関わっていると言われています。例えば、生きたアヒルやニワトリを同じ場所で販売する市場があり、そこではニワトリなどを生きたまま売買する習慣があり、ヒトと鳥との接触が身近な環境にあることが指摘されています。

中国政府も根絶を目指し、患者発生が多い地域では、生きたニワトリなどの販売を禁止するといった積極的な措置を取っています。

1970年代のソ連風邪(H1型)のいずれもが、ヒトに容易に感染する能力を獲得した鳥インフルエンザを起源とします。

中国の新たな鳥インフルエンザウイルスの発生は決して「対岸の火事」ではありません。日本でも過去に、近接国から渡り鳥を介して養鶏場で鳥インフルエンザが発生しています。我々を取り巻く鳥インフルエンザウイルスの動向には、いつもの注視が必要です。(県感染症情報センター)